



人と農と環境をつなぐ技術を考える

## 国際耕種とつくば研修との縁(えにし)

この秋よりお世話になります国際耕種を初めて知ったのは三年間の青年海外協力隊から帰国した1996年になります。協力隊活動に遣り切った感はあるが、自身の取った方法やその成果には疑問だけだった私が偶然閲覧した設立趣旨の「適正技術」「適正規模」「住民参加」の文言に自身の技術協力の方向性を明示された気がし、翌週には町田事務所にお邪魔してその後も折に触れ近況など報告するお付き合いを続けて参りました。

これまで JICA 専門家またコンサルタント調査団員として技術協力プロジェクトや開調型技協案件に携わり、エチオピアでは「技術開発」とは「品種開発」を意味し「住民参加」とは試験場での「展示栽培」に終わってしまう傾向に



研修視察旅行を見学(2018)

在る研究者に対して普及部門との連携や農民ニーズを基にした「農民参加型」実験課題設定による「栽培品種のポテンシャルを最大限発揮する栽培技術」としての「適正技術」開発を支援する活動を、またイラクでは「農民参加」の基礎である筈の農民とのコミュニケーションに悩みを持つ普及員に対して、対話型ファシリテーション技法と栽培・加工・営農等に係る技術普及教材・資材の作成ワークショップを開催するなど、様々な農業技術開発・普及に関わる業務を実施してきました。

是ら経験を通して「適正技術」を「適正規模」の内に「住民参加」を通して開発・普及していく為に栽培・営農技術や普及・教育技術だけでなく、農民が抱える諸問題から適正技術開発の為の

課題を抽出するコミュニケーション能力や農民が適正技術にアクセスする為の知見及びノウハウの集積・整備など総合的な適正農業技術開発・技術普及の為の人材育成の重要性を痛感しています。

つくば研修事業との縁は 1998 年度に集団研修「野菜栽培技術コース」「野菜採種技術コース」において研修指導補佐として研修業務に携わった事に遡ります。日々の業務を通じて本邦有用技術の教示や通常業務における利便性、来日研修員の親日感の醸成、また技術協力の現場の公開による国民理解を深めて貰う場の提供など、本邦技術研修の国際協力における優位点を認識する事が出来ました。国際耕種の 18 年に渡る研修業務受託の実績に裏打された研修ノウハウを基にこれからの「本邦技術研修」が開発協力に果たせる役割について新たな可能性をも感じています。

私自身、派米農業研修や大学院留学など海外での緊張感を伴った“自己研鑽の愉しさ”を体感しました。来日研修員達が研修期間中にその醍醐味を味わい、習得



協力隊補完訓練生と(1998)

された適正技術と共に其々の国に戻って活躍され、そして日本の国際協力の仲間としてばかりでなく、一日本ファンとして出身国に於いて日本理解の拠点となって貰えるだけでもその意義は計り知れないものがあると思います。今はその大きな仕事に携わる機会を得た縁(えにし)を嬉しく感じております。

(2018年8月 新出晃隆)